

3. 手続き・倫理的配慮

質問票は無記名であり、授業の中で配布され、実施後、回収された。回答時間は約 10 分であった。参加者には教示文の中で、回答は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、授業の成績・出席とは関係しないことが強調されていた。回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなした。回収率は 82.5 %であった。

結 果

1. 俗信的しつけ言葉の経験

項目ごとに「言われた程度」の回答(1~4 点)に「生活に影響している程度」の回答(0~4 点)を乗じた得点(0~16 点)を算出した。まったく言われた記憶がない場合は 0 点となる。この得点は俗信的しつけ言葉を受けた経験だけでなく、しつけ言葉が現在の生活行動への統制力をもつ程度も表している。内在化度の上位 3 項目は、「ご飯を食べてすぐ寝ると牛になる」($M=6.55, SD=5.44$)、「一円を笑う者は一円に泣く」($M=5.25, SD=4.83$)、「夜口笛を吹くとへビが出る」($M=4.84, SD=5.46$)であった。俗信的しつけ言葉の内在化得点は一因子構造であった(α 係数 .87)ため、13 項目の合計得点を俗信的しつけ言葉経験得点(0~208 点)とした。性差は有意ではなかった(男性 $M=38.94, SD=33.55$; 女性 $M=45.14, SD=37.84$)。

俗信的しつけ言葉 ^{a)}	平均値	SD
4.ごはんを食べてすぐに寝ると、牛になる	6.55	(5.44)
1.一円を笑う者は、一円に泣く	5.25	(4.83)
11.夜口笛を吹くと、へビが出る	4.84	(5.49)
12.夜爪を切ると、親の死に目に会えない	4.54	(5.23)
13.霊柩車を見たら親指を隠さないと、親の死に目に会えない	4.16	(5.55)
2.嘘をつくとも、舌を抜かれる	3.46	(4.42)
10.へそを出していると、へそを取られる	3.35	(4.09)
6.食べ物を粗末にすると、目がつぶれる	2.12	(4.32)
3.ごはんをこぼす・残すと、目がつぶれる	2.11	(4.29)
5.敷居を踏むと、お父さんの頭を踏んだことになる	1.78	(3.93)
9.火遊びをすると、おねしょをする	1.75	(3.53)
8.泣くと、おばけが呼びに来る	1.13	(2.81)
7.テーブルの上にあがると、足が曲がる	1.00	(2.89)
俗信的しつけ言葉経験得点(合計点)	42.04	(35.70)

^{a)} 数字は質問紙での項目番号。上から得点順に並べられている。

2. 道徳的判断タイプ

25 項目の判断得点(1~4 点)を因子分析(主因子法、斜交回転)した結果、2 因子が抽出された(Table 2)。因子 1 には規則違反と自愛のなさに関連した項目の負荷量が高く、因子 2 には反社会的項目

の負荷量が高かった。因子1は状況に応じて判断の変わりうる慣習／自己管理領域、因子2は直接的に他者へ悪影響をもたらす道徳領域の認知を反映していると解釈される。

2つの因子得点をK-Means法によるクラスター分析にかけたところ、3つのクラスターが見出された(Figure 1)。クラスター1(N=180)は両因子の得点が高く、過剰抑制を示す型、クラスター2(N=98)は両因子の得点が高い統制不全(自由肥大)型、クラスター3(N=102)は慣習／自己管理領域では自由感が強く、道徳領域では抑制的になるといった領域対応型であると定義された。性差をみたところ、男性には統制不全型が多く、女性には過剰抑制型と領域対応型が多かった($\chi^2(2, N=380) = 29.12, p < .001$)。

Table 2 道徳的判断の因子分析結果

項目 ^{a)}	因子1 慣習／自己 管理の領域	因子2 道徳領域	共通性
10.お金を大切にしない。	.696	-.130	.320
9.喫煙する。	.600	-.125	.319
17.母の日や父の日等の記念日に、プレゼントを贈ったり連絡をしたりしない。	.529	-.029	.213
5.自分の部屋を掃除しない。	.492	.013	.335
13.昔からの慣習を無視する。(敷居を踏んで歩く等)	.488	.093	.352
16.知らない番号からの電話に出る。	.447	-.066	.415
7.痩せようと思い、一日一回しか食事をとらない。	.429	.000	.337
19.お年寄りや子ども連れがいても席を譲らない。	.415	.098	.327
25.ものを食べながら歩く。	.413	.202	.378
12.ご飯を残す。	.394	.068	.471
8.テストの直前にしか勉強しない。	.393	.001	.275
6.近所の目上の人に“若者言葉”で話をする。	.380	.237	.307
20.電車やバスの中で足を組んで座る。	.346	.089	.424
15.深夜に一人で歩いて帰る等、防犯意識を持たない。	.323	.188	.326
23.路上にごみをポイ捨てる。	-.170	.824	.242
22.路上にガムやつばを吐く。	-.123	.754	.315
18.並んでいる列を無視して入り込む。	-.085	.620	.360
1.親の財布から、黙ってお金を取る。	.053	.451	.366
2.学費(授業料)を遊び目的で使いこむ。	.071	.450	.227
21.電車やバスの中で携帯電話で話をする。	.134	.439	.355
11.人を陥れるような嘘をつく。	.182	.363	.519
24.仲間と道幅いっぱい広がって歩く。	.167	.343	.560
3.ネット上での情報を自分のものとして引用する。	.009	.342	.340
	因子間相関	.510	

^{a)}数字は質問紙での項目番号。

3. 道徳的判断タイプと俗信的しつけ経験との関連

俗信的しつけ経験得点について、2(性)×3(道徳的判断タイプ)の分散分析を行った結果、道徳的判断タイプの主効果のみ有意となった($F(2, 374) = 3.78, p < .05, \eta^2 = .02$)。俗信的しつけ経験得点は抑制過剰型($M = 47.86$)が最も高く、次に領域対応型($M = 39.37$)、そして統制不全型($M = 34.12$)であった。

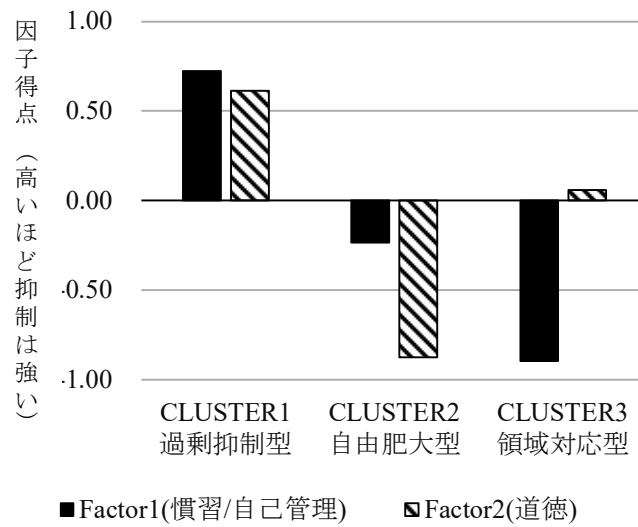


Figure 1 クラスタ分析の結果

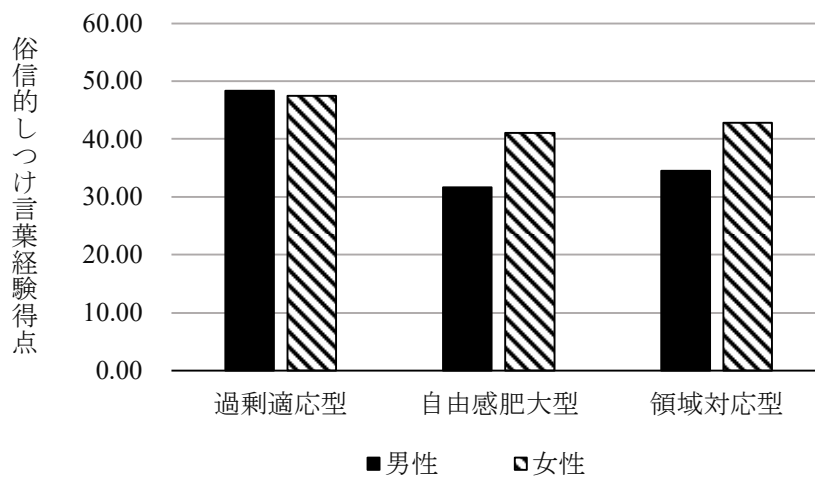


Figure 2 道徳的判断タイプと性別にみた俗信的しつけ言葉経験

考 察

本研究に参加した大学生が幼少期に受けた俗信的しつけ言葉経験の合計得点は、平均して 42.04 点(満点は 208 点)であり、さほど大きくはなかった。しかしながら俗信的しつけ言葉は、子どもに恐怖心を与える内容のものが多いため、たとえ経験度は少なくても、また内在化度が低くても、その言葉を受けた時には多少の恐怖感や不安感を経験したと思われる。実際に俗信的しつけ言葉を多く受けた大学生の道徳的判断には歪みが認められた。つまり、道徳的な逸脱場面だけでなく、慣習的および自己管理上の違反に対しても自己抑制的になる大学生は、俗信的しつけ言葉経験を

強くもっていた。挨拶や言葉づかいといった慣習行為は、通常は守らなければならないものであるものの、状況によっては他者との同意に基づき、あるいは自己の意思で変容可能な行為でもある。ダイエットや嗜好と関係する自己管理の行為は、基本的に他者に悪影響が及ぶものではなく、個人の裁量の範囲内で自己決定できるものである。このような慣習と自己管理の行為場面であっても、俗信的しつけ言葉経験を多く持っている大学生は従順で抑制的になることが示唆された。この結果は、幼少期のしつけであっても、規則や大人の期待に一樣に従わせようとするしつけ言葉の影響が長期間続く可能性を示唆している。この過剰抑制の背景には、大人から言われたことに違反する行為や社会的規範に背く行為に対する不安や恐怖が隠れていることも考えられる。

Kusumoto ら(2019)は、思春期から成人期前期までの参加者に、道徳、慣習、個人領域の要素が含まれる様々な場면을提示し、その場面での自由裁量判断を求めた。参加者の年齢は異なっていたものの、共通して、領域の特徴に合致する判断をした「領域対応型」だけでなく、慣習と自己管理場面にも「個人の自由」が及ぶと判断する「自由感肥大型」、及び私的な場面でも「個人の自由」を抑制する「過剰抑制型」の参加者がいることが示された。そして、「自由感肥大型」の参加者は相対的に学校適応が悪く、親への信頼感も低く、道徳的無力感が強く、心理的適応が悪いことが示された。Kusumoto ら(2019)の見出した「自由感肥大」と本研究での「過剰抑制型」は、道徳的自律の観点からは真逆のタイプである。道徳性に関する社会的領域理論(首藤・二宮, 2003; Turiel, 2006, 2008)では、行為者の意図や動機、他者との関係、状況の特徴などを考慮した上で、ひとつの場面に対して複数の領域認知を働かせて(領域調整)、自分にも他者にも公正な解決をしようとするのが道徳的自律である。換言すれば、道徳的自律には領域調整が求められる。「過剰抑制」も「自由感肥大」も多面的な領域調整ではなく、一樣な指向性を示していることから、本研究の結果は、俗信的しつけ言葉が子どもの道徳的自律に歪みをもたらすことを示唆している。

Tonegawa, Ueoka, Kusumoto, & Shuto(2019)は、幼児期の子どもを育てている親の俗信的しつけ言葉経験を調査し、俗信的しつけ言葉の内在化の程度が高い親ほど、子どもを親の意思でコントロールしようとする傾向が強くなることを見出した。また、場面別養育態度との関連をみると、行為の理由に関係なく悪いと判断されうる道徳的逸脱と子どもの意思に委ねてもよいと判断できる個人領域の行為場面では、俗信的しつけ言葉経験との有意な関連性を認められないものの、状況によって善悪の判断が異なってくる社会的慣習違反への厳しいかかわり方と有意な関連が認められた。彼らの研究結果は、幼少期に受けた俗信的しつけ言葉が、親になってからの子育ての仕方を統制的な性質にすることを示唆している。俗信的しつけ言葉は、子どもを従順にするための文化的な知恵として何十年、何百年もの間、日本社会で受け継がれてきた。しかし、そのしつけを受けた時の恐怖心は、若者になってからの道徳的自律に歪みをもたらし、親になってからの統制的な子育てを強め、そして自分の子どもに恐怖心を植え付けることになる可能性を示唆しているのかもしれない。

Bandura(2016)は、反社会的な行為にも道徳的不活性化(moral disengagement)という社会的認知のプロセスが存在することを理論化し、実証研究を続けている。道徳的不活性化は認知の歪みから生じる。俗信的しつけ言葉には、「ご飯を残したら、目がつぶれる」のように、行為と結果との間に理性的で合理的な因果関係はない。俗信的しつけ言葉の経験と道徳的自律の歪みとの有意な関係は、俗信的しつけ言葉が道徳的判断を不活性化させる文化的な要因であることを示唆しているのかもしれない。これは今後の研究で吟味されなければならないだろう。

(2020年3月31日提出)
(2020年4月10日受理)

Effect of Childhood Experience with Superstitious Sayings as Pedagogical Discipline upon Current Moral Judgment Type in Japanese University Students

SHUTO, Toshimoto

Saitama University, Faculty of Education

TONEGAWA, Tomoko

Tohoku Fukushi University, Faculty of Education

UEO , imi

Sendai Shirayuri Women's College, Faculty of Human Sciences

SUSUTOVO, Chisato

Okayama Prefectural University, Faculty of Health and Welfare Science

Abstract

Superstitious sayings, e.g., “If you don’t finish your rice (even one grain of rice left), you will go blind”, are kinds of the disciplinary phrases of admonishment used in child-rearing situations. The purpose of this study was to examine the relationship between the experience of discipline using superstitious sayings received in childhood and the current characteristics of moral judgments among 380 Japanese university students. Participants were presented with 13 kinds of superstitious sayings traditionally transmitted to Japanese society, and for each of the 13 items, they rated the degree to which they experienced in childhood and the experiences affected their current life. In addition, the participants were shown 25 items about socio-moral issues, and rated each of them the degree of personal freedom. Factor analysis was carried out on judgment scores of the personal freedom, and two factors (moral domain, conventional / personal domain) were extracted. The participants were classified to three types of moral judgments, i.e., domain-consistent type, excessive feelings of freedom type, and morally over-controlled type, as a result of the cluster analysis on two factor scores. Results of ANOVA showed that the morally over-controlled type students had significantly higher levels of experience and influence of the superstitious sayings than other types. This result was considered that the style of the discipline which brings a child fear and anxiety may distort a child's moral judgments, and will prevent moral autonomy in the future.

Key Words: superstitious sayings, moral judgments, morally over-controlled, moral autonomy